



成長編

西暦1832年～1861年
圭介0歳～29歳

日本の動き

- 1832年 「富嶽三十六景」の完成
- 1837年 大塩平八郎の乱
- 1841年 天保の改革
- 1853年 ペリー来航
- 1854年 日米和親条約
- 1856年 ハリス来日
- 1858年 安政の大獄
- 1860年 桜田門外の変

圭介の動き

- 1832年 圭介誕生
- 1835年 「天下泰平」と書く
- 1845年 閑谷学校に入学する
- 1852年 適塾に入塾する
- 1854年 江戸にて、大木塾の塾頭になる
- 1856年 カメラを作成する
- 1857年 尼崎藩に仕官する
- 1860年 大鳥活字を作る

偉人の言葉・大鳥圭介評

篤姫: 圭介が指導したカメラで写真を撮ってもらったわ!



圭介は篤姫の父である島津斉彬に洋学の才能が認められ、薩摩藩の本の翻訳や解説を行っていました。

ジョン万次郎: 何人にも英語を教えたが、圭介は大変優秀じゃった。



アメリカより帰国した万次郎は幕臣に英語を教えており、圭介もそこで英語を教わります。また万次郎がアメリカで買ったカメラで圭介の写真を撮りました。

大きな世界へ



天保3年大鳥圭介、幼名慶太郎は、兵庫県赤穂郡細念村(現在の上郡町岩木地区)に生まれました。当時は、日当たりが悪くネギも育たない閉ざされた小さな村でした。このころ、西日本一帯に天保の大飢饉がおきました。



3才の頃から神童と言われ、その一方で、お祭り好きなガキ大将でした。しかし、お祭りの前夜に弟が生まれたために、村の風習で、お祭りに行けなくなり、「なんでお祭りに行けないんだ」と泣き崩れました。

閑谷学校



慶太郎が10才になった時、祖父の純平が慶太郎を姫路へ連れ出しました。「大きな世界の中で色々な事を学びたい」と、思った圭介は、祖父が学んだ岡山の閑谷学校で様々なことを学びました。



閑谷学校の隣にある椿谷では、夜中になると学生たちがよく肝試しをしていました。この肝試しの始まりは、勉強ができガキ大将だった慶太郎と、武士の子供たちとの言い争いから始まったという説があります。

圭介が3才のとき、村の人々に神童と言われたのはなぜでしょう?

A 3歳の氏神参拝のとき、「天下泰平」と漢字で書きみんなを驚かせたからです。その後、閑谷学校で5年間漢学や儒学を学び、上郡に帰郷。この頃、名前を慶太郎から圭介と改め、赤穂の町医者・蘭医の中島意庵の薬箱持ちをしながら医学を学びました。

勉強がしたい



圭介は蘭学の勉強のため、緒方洪庵が開いた大阪の適塾へ入塾しました。年は違いますが、適塾の門下生には福沢諭吉や大村益次郎などもいました。

適塾では、一冊しかないオランダ語の辞書を取り合い勉強をしました。また、お金を稼ぐため、洋書の書写や翻訳のアルバイトをしました。

しかし、塾生たちはお金がないため、わざと人とぶつかって水の入った徳利を割り、お酒を弁償させて飲んだりしました。

圭介は更なる知識を求め、江戸に行きたいと思っていました。しかし、お金がないため、親に帰郷するお金を送ってくれと嘘をつき、そのお金で江戸へと向かいました。

国産カメラ第一号



江戸で大木塾に入塾した圭介は、その才能を認められ、すぐに塾頭を任せられました。それで有名になった圭介は江川塾に引き抜かれ、そこの教授になりました。

この頃圭介は、誰にも教わらず、オランダ語の本を読んで、日本初のダゲレオタイプのカメラを作りました。

そのカメラで、最初に撮影したものは、「鬼がわら」でした。この時のカメラは撮影に長い時間がかかるため、動かない「鬼がわら」がちょうどよかったのです。

薩摩の殿様である島津斉彬に頼まれ、篤姫が結婚するときの写真の撮影を指導しました。島津斉彬はその写真を大事にしたとのこと。

Q 圭介が学んだ適塾からは数多くの偉人が輩出されていますが、誰がいるでしょうか？

A 適塾の出身者には、福沢諭吉や大村益次郎に加え、手塚良仙(手塚治虫のひいおじいさん)、佐野常民(日本赤十字社初代総裁)、本野盛亨(読売新聞創業者)ら数々の偉人がいます。その中でも、圭介はその功績を広く賞賛され適塾出身の偉人として、大阪大学適塾記念センター内で、パネル展示されています。

Q 圭介が島津斉彬に笑われてしまったと伝えられるのはどんなことでしょうか？

A ざるそばの食べ方です。洋学が得意な圭介は、薩摩の殿様である島津斉彬にその知識を買われ、仲良くなりました。ざるそばを一緒に食べた時、つゆをそばの方にかけて食べる圭介を見て、「圭介は洋学はよく知っているが、ざるそばの食べ方は知らないのか」と笑われたという逸話があります。